

NewsLetter

自治医科大学地域医療オープン・ラボ

Vol.116,Mar,2017



TMM 講座開講 - 「地域医療を論文にする」

慶應義塾大学 医学部 ブリヂストン臓器再生医学寄附講座
自治医科大学 先端医療技術開発センター (小林研)
小林英司 (新潟5期卒業)

地域医療は、医療制度や社会の変化を受け、多様な医療ニーズに対応していく必要があろう。自治医科大学卒業の医師も40年近くの経験を持ちはじめている。地域で多様な医療が必要な症例を担当したとき、個別問題の最適化の視点だけでなく病状の全体像を把握して医療モデルとしての最適化を目指したいと考える卒業の仲間が新潟県魚沼地域に集結した。その中心人物が、魚沼市立小出病院の布施克也病院長(7期)、県立十日町病院の吉峰文俊院長(8期)、そして県立松代病院の鈴木善幸院長(9期)である。私は自治医大卒の先輩(5期)として彼らの集結を祝う宴席で、30年前にこの地で地域医療を経験した思いが、彼らとの再会で花開いた。彼らの総合医としての経験を結集して、内科や外科などの科別の枠を超え、生活モデル最適化をトータルにマネジメントできる診療力の養成を目指しTotal Medical Management(TMM)総合診療医講座を開くことになった。主催は、新潟大学 新潟地域医療学講座：井口清太郎教授、共催は同大学地域医療教育センター(魚沼基幹病院)：高田俊範センター長である。そして新潟大学をはじめ関東圏の医療機関から地域医療実習にきている研修医、学生さらに地元医療機関に携わる看護師等で定期的(1-2か月に一度)勉強会を開始した。



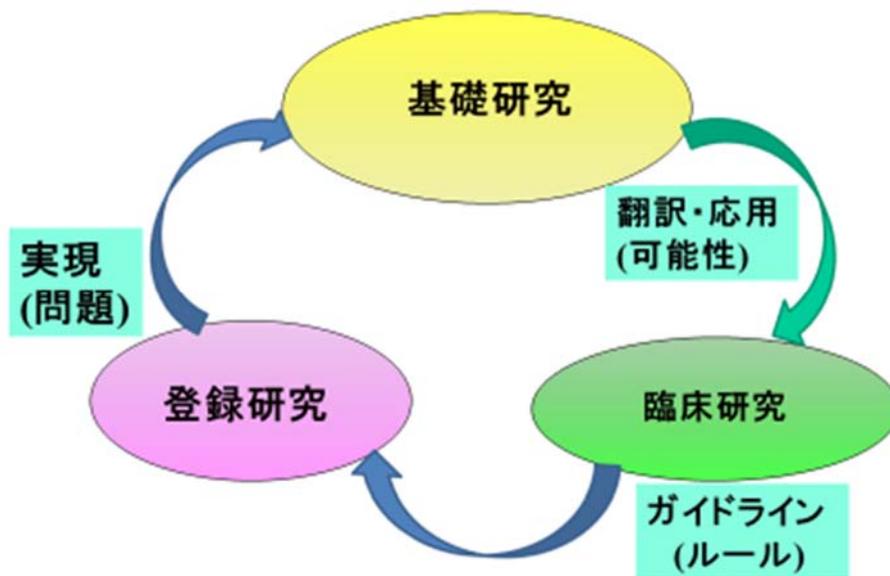
第3回TMM講座(2016年11月18日、六日町)：前列向かって右から鈴木、布施、小林

私は「もの書き英司」と称して「地域医療を論文にする」と題して参加となった。地域医療から離れて久しく臨床医としては使い物にならなくなっているが、自分が経験したことを論文に残すことは、地域医療であり、研究であり、行なってきたことである。次世代の後輩が、書いたものを見て共感することもあるし、反面教師となる場合もある。義務年限の9年間、地域医療に従事しながら書いた地域医療に関する34の論文 (<http://organfabri.med.keio.ac.jp/archives-japanese1983-1990%20.html>) が自信になっているが、還暦を超え下記の理由から医学自体を見つめてみたいという気持ちがそうさせた。

医学は基礎研究から始まり、臨床研究、そして登録研究を経て、医療として確立する。医学を志す者は、その多様な領域で一生学ぶことができる。その過程は、30—40年のサイクルと言われている。私自身は自治医大を卒業して35年を迎える。例えば、基礎研究においてネズミで生理活性を持つ物質がわかったとする。それが人に薬として投与されるまでに、平均で11年、約1,000億円ものお金がかかる。さらにそれが、一般薬として臨床で使用できるのは、2—3万に1つの世界でもある。そしてその薬が患者さんに投与されて、効果や副作用が判明し、安全に使うためのガイドラインが提案される。この過程で10年は必要とされるだろう。しかしそれでは終わらない。さらにそれらの患者さんが登録され、10年以上の長期予後が登録研究で明らかになる。それ故、医学・医療のサイクルが30年と言われるのもわかる。

自分が医師になり将来どの分野にのめり込むかは、自分のおかれた環境にも左右されるが、地域医療という患者をトータルに診ることで将来必要なことを学ぶことができるであろう。

医師が研究を続けなければならない理由



(小林、教育講演 第52回日本小児外科学会2015)

臨床が一通りわかるようになるには7—10年の歳月が最低必要である。地域医療や総合医療は、その面で医学の基本を学ぶよい機会である。基礎医学は、自然科学の一部であるが、医学を実学と考えれば、臨床研究さらに登録研究の問題点をしっかり自覚してから、基礎研究することもいいかと思う。ここで重要なことは、「患者さんが教科書」であり、すべての医学分野に共通する出発点でもあろう。

「ものを書く」にはエネルギーがいる。しかし、患者であれネズミの実験であれ、自分が経験したことを「まとめる」ことは、独りよがりにならないためにも必要なことである。

自治医科大学地域医療オープン・ラボの News Letter に関係するのは今回で3回目である。過去の2回は、Vol. 9の「医療技術トレーニング部門開設」 Vol. 13の「自治医科大学「女性医師支援センター」の開設について」であるが、自治医大の教員としてやり始めたことであった。また学生教育では全員卒業、全員国家試験合格100%が成し遂げられたころでもあった。いずれも10年前のことであるが、自分自身の10年前を振り返る機会となったが、今後の自治医科大学地域医療オープン・ラボのさらなる活発化を期待したい。

！！地域医療オープン・ラボNews Letter原稿募集！！

地域医療オープン・ラボでは、自治医大の教員や卒業生の研究活動を学内外へ発信するために、「自治医科大学地域医療オープン・ラボNews Letter」を定期的に発行しています。

<http://www.jichi.ac.jp/openlab/newsletter/newsletter.html>

- ☆ 自治医大の教員や卒業生の研究活動をご紹介ください
- ☆ 自薦・他薦を問いません
- ☆ 連絡先:地域医療オープン・ラボ openlabo@jichi.ac.jp

【発行】自治医科大学大学院医学研究科

地域医療オープン・ラボ運営委員会

事務局 大学事務部学事課 〒329-0498 栃木県下野市薬師寺 3311-1

TEL 0285-58-7044/FAX 0285-44-3625/e-mail openlabo@jichi.ac.jp

<http://www.jichi.ac.jp/graduate/index.htm>